

王であるキリスト

2014. 11. 23

第一朗読 エゼキエル 34・11-12

第二朗読 I コリント 15・20-26、28

福音朗読 マタイ 25・31-46

クラレチアン宣教会 長崎壮助祭

わたしたちは今日、ミサの中で「王であるキリスト」を祝います。

それと同時に、教会の暦の上では、今日は年間最後の主日にあたります。そのため、ここ数週間の主日ミサの朗読は終末を思い起こさせるメッセージが多くなってきていることをお気づきの方も多いでしょう。

年間最後の主日ですから、朗読される福音は、わたしたちが今年一年間のミサの中で聞いてきたイエス様の教えの集約でもあります。

第一朗読では、自分の民の世話をし、養い、導く「良き羊飼い」としての王としての神の姿にイエス様を重ね合わせて読むことが出来ますし、第二朗読のパウロの手紙では、永遠のいのちに反対する権力を破壊し、復活によって死を乗り越える王としてのキリストが語られています。今日はイエス様がどのような王であるかをもう少し皆さんと共に考えてみたいと思います。

日本は王国ではありませんから、王様と聞いて多くの方が想像するのは、先ず沢山の家に仕えられている人のイメージです。しかし、どのような王国であれ、国民が多ければ多いほど自分の支配する国、社会の中で「小さな人」とされる人々との接点が少なくなるのではないのでしょうか。そう考えてみると王様というのは、“自由のない” 少し窮屈な立場のような気がします。

一方、イエス様の生涯とその教えを振り返りつつ、イエス様がどのような王様なのかを考えてみると、普通に考えられる王様とは違う点が見えてきます。

イエス様はベツレヘムの馬小屋で生まれましたが、“全くの自由さ”をもって病気で苦しむ人々、差別を受ける異邦人、罪人のレッテルを張られた人々にすすんで会いに行き、親しい友として寄り添います。

イエス様自身も、「わたしは仕えられるためではなく仕えるために、また、多

くの人の身代金として自分のいのちをささげるために来た」(マタイ 20・28) と仰る通りです。

その愛の奉士の頂点が、十字架の死でした。

今日の福音の中のイエス様の御言葉を見ますと、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と、本来連帯すべき社会の中から仲間はずれにされた人々の痛みを自分の痛みとして共に苦しむキリストの姿が甦ってきます。

そして、左右に分けられた人たちと王との会話を見てみると、興味深いのは左右に分けられた双方がその理由を分かっていないことです。

「正しい人」と、右に分けられた人たちは、王に向かって「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか」と、自分のしたことの意味を分かっていません。これは、「呪われた人」として左側に分けられた人々も同様です。

つまり、ここでは自分が行ったことを覚えていないほど小さなことが、問題とされているわけです。「小さな人への奉仕」というのは、通常、人の目にはつきまませんし、評価されることはありません。この世的な価値観からすると、損をする生き方なのかもしれません。

しかし、初めにお話したように、これまで一年間の御言葉のダイジェストとして今日の福音を読むとき、わたしの頭にはマタイ福音書6章の「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる」というあの御言葉が思い浮かんでくるのです。

一般社会では、人やその所有物に危害を及ぼさない限り裁きの対象になりませんし、困っている人に無関心であっても、善良な小市民として小さな幸せを守ることができます。

しかし、キリストが王として君臨する国では、細かい法律のようなものではありません。そこで求められているのは「わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたも互いに愛しなさい」というたったひとつの愛の掟、そしてその実践として助けを必要としている人への具体的な奉仕です。

へりくだって人々に仕えること、全ての人の僕となることで、キリストは王

の位にまで挙げられました。キリストの福音を聞いてきたわたしたちも、キリスト同様に、助けを必要としている人々の隣人となり、寄り添って生きるように招かれていることを思い起こし、来週から始まる新しい一年、待降節に備えましょう。